

# 保健発達部門編

# 第1章 概要・機能

## 概要

保健発達部は平成10年4月に発足した。子どもの健康、疾病の予防に関わることと、子ども、とくに乳幼児の発達異常に関わることを目的としている。

埼玉県では年間5,000人の障がい児および境界児が発生していると推計された。このような子ども達に対し、予防はもとより障がいを早期に発見し、治療や訓練を行うことが重要であるとの認識が高まり、子どもの発達を促す機構の設立が検討され、平成7年3月、埼玉県小児発達促進センター（仮称）基本計画策定委員会の答申書が出された。これに基づき、大宮小児保健センターの移転も合わせて、平成8年8月に着工、平成10年3月に総面積3,858.93㎡の鉄筋コンクリート2階施設、「保健発達棟」として小児医療センター敷地内に完成した。

昭和42年8月、大宮市土呂町に全国で3番目の小児専門医療施設として「埼玉県小児保健センター」が開設された。昭和58年4月、埼玉県立小児医療センターの開設に伴い、「埼玉県立小児医療センター付属大宮小児保健センター」として、子どもの健康増進、疾病の早期発見、地域小児保健活動の援助など小児保健活動を行ってきた。平成10年3月をもって小児保健センターは30年間の歴史を終え、埼玉県立小児医療センターに完成した保健発達棟に移転した。

平成10年4月、新規事業としての発達部門と大宮小児保健センターでの事業継続である保健部門とを合わせ、保健発達部とし、診療機能を踏まえた名称で「保健発達センター」としてオープンした。

平成13年1月、埼玉県予防接種センターが併設された。

平成17年6月、理学療法士、作業療法士が各1名増員され、総合リハビリテーション施設Aの認定を取得した（現在、脳血管疾患・運動器・呼吸器リハビリテーション料Iの施設基準に該当）。

## 機能

### 1 保健部門

県内の小児保健の中核として機能を果たす。そのための機能として下記を行っている。

- 1) マスククリーニング検査：県内（さいたま市を除く）出生児全てに対して先天性代謝内分泌異常症のスクリーニング検査の実施・報告と異常児に対する事後措置  
平成24年10月からはマスククリーニングろ紙血を使用したタンデムマス分析で、新たな先天性アミノ酸・有機酸・脂肪代謝異常症の検索を開始
- 2) 予防接種センター・予防接種外来：地域医療機関、保健機関で予防接種施行が困難な児への評価と接種、予防相談、予防接種の情報提供と啓発、医療・保健担当者の指導、海外渡航、移住に伴う予防接種の実施
- 3) 専門外来の実施：小児医療センター内、地域医療機関、保健機関等からの紹介児を対象とする下記外来
  - ① 精神保健外来：情緒・行動の問題、学童期の発達障がいの診察、カウンセリングとコンサルテーション、虐待防止対策（虐待防止チームと連携しての評価と相談、関係機関との連携）
  - ② 遺伝外来：出生前、出生後の先天異常の診断、遺伝相談、生活指導と発達評価
  - ③ 生活アレルギー外来：アレルギー疾患の評価、生活指導、治療
- 4) 育児支援：電話相談、面談相談、デイケア指導、多職種プログラム外来・集団外来（発達部門で後述）での育児支援
- 5) 埼玉県小児保健協会（本部：保健発達部内）による小児保健に関する啓発事業と地域指導者育成に積極的に協力

6) その他：小児保健に係わる全般の活動

2 発達部門

院内、地域医療機関、保健機関等からの紹介児を対象とする。また、県内における小児発達支援のための中核としての機能を果たす。そのための、機能として現在、下記を行っている。

- 1) 発達評価外来：発達を総合的に評価し、地域における事後措置につなげるための外来
  - ① アセスメント外来：発達外来の評価により更に精密で多角的な評価が必要と判断された児を対象に行う医師、看護師、作業療法士、言語聴覚士、臨床心理士、視能訓練士、保育士等の多職種による総合的発達評価
- 2) 発達支援外来：機能訓練とその評価、支援を主体とする外来
  - ① 発達外来：医師による発達障がいの評価と医学的診断、生活指導と治療効果の評価を中心とする経過観察
  - ② 理学療法外来：理学療法士による主に粗大運動機能向上、哺乳摂食機能向上、呼吸機能安定のための評価、訓練、支援
  - ③ 作業療法外来：作業療法士による主に微細運動機能向上、感覚統合機能向上、日常生活活動技能向上のための評価、訓練、支援
  - ④ 言語聴覚療法外来：言語聴覚士による主に難聴、口蓋裂、気管切開、発達障がい等に伴う言語、聴覚、音声、コミュニケーション機能に対する評価、訓練、支援
  - ⑤ 心理外来：臨床心理士による主に発達評価とカウンセリング
  - ⑥ 視能訓練外来：視能訓練士による主に視機能異常に対する評価、訓練、支援
- 3) 多職種特別外来：同一疾患を有する児と家族が複数参加し、多職種による総合的評価、訓練指導を多角的におこない、併せて家族間交流を図る機能を有する外来
  - ① DK 外来：ダウン症児を対象とし、遺伝科医師、看護師、理学療法士、作業療法士、臨床心理士、栄養士、ソーシャルワーカーが担当
  - ② かぶとむし外来：二分脊椎症児を対象とし、整形外科医師、脳神経外科医師、看護師、理学療法士、作業療法士が担当
  - ③ もぐもぐ外来：哺乳・摂食障がい児を対象とし、神経科医師、歯科医師、看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、臨床心理士、栄養士が担当
  - ④ 難聴ベビー外来：0歳の難聴児を対象とし、耳鼻咽喉科医師、看護師、言語聴覚士、音楽療法士、ソーシャルワーカー、保育士が担当
  - ⑤ ことり外来：気管切開児を対象とし、耳鼻咽喉科医師、看護師、言語聴覚士が担当
  - ⑥ つくしんぼ外来：出生体重 1500g 未満の児を対象とし、新生児科医師、看護師、理学療法士、作業療法士、臨床心理士が担当
  - ⑦ 痙縮治療外来：重度の痙縮を呈する脳性麻痺児を対象とし、脳神経外科医師、整形外科医師、理学療法士、作業療法士が担当
- 4) 装具診外来：整形外科医、理学療法士、作業療法士による装具の適応検討と処方をおこなう外来
- 5) 発達支援のための啓発と教育、地域連携、研究会、研修会の開催、学生研修、地域指導者育成、講師派遣、地域保健機関・発達機関関係者との情報交換
  - ① 早期子育てサポートプログラム：発達障害と診断されていないが、発達や行動特性が気になる等の養育の悩みを有する養育者、ならびに自閉症スペクトラム症の診断を受けた子どもの養育者を対象とし、言語聴覚士と作業療法士が専門的な視点で至適な養育方法に関する

る講習。講習 1 クールは各回 2 時間、3 回の講義で構成するものである。

## 6) 発達支援に係わる全般の活動

最近 10 年以上にわたり、埼玉県の年少人口の減少は顕著となり、推計値より低値を示す状態で、急速に少子化が進展している。さらに、埼玉県の高齢者人口は今後 10 年間で 50%以上の増加と国内でも最高の高齢者人口増加が予想され、埼玉県は世界にも類を見ない少子高齢化を迎える可能性が高い。この様な中、今まで以上に小児医療・保健の質を向上させるとともに、障がいをもつ児の就学から就労までを含めた社会参加を推進し、自立を促す為の小児に対する全人的(リ)ハビリテーションのシステム創成と実現、ならびに予防医学の発展の必要性は確実なものとなっている。

より良質な小児保健、全人的な発達支援を推進するためには、子どもの人権尊重を基本として、時代に即した新しい考え方や方法論を創出し、それを導入、さらにその問題・課題を積極的に提起・解決することが大切である。同時に心身両面にわたる小児(リ)ハビリテーション訓練施設の充実や小児(リ)ハビリテーションに係わる専門家の育成も解決すべき重要な課題である。小児の(リ)ハビリテーションは、成人におけるリハビリテーション・rehabilitation (語頭の re は again、もう一度の意味)、すなわち機能“回復”訓練とは異なるものである。すなわち、小児の(リ)ハビリテーションとは、個々の障がいの特性、養育環境の特性を理解し、子どもを全人的な観点でとらえ、養育にかかわる周囲とともに、特性を補完するように発達を促し、社会への適応を促すことである。臨床の実際としては、①発達障がい児の医学的診断・治療、②心理分析・発達評価、③微細運動・感覚統合機能向上を目指す作業療法、さらに④発達障がい、難聴、口蓋裂、気管切開児の言語・聴覚療法、⑤粗大運動・呼吸・哺乳摂食機能の向上に取り組む理学療法から構築されており、障がいをもつ小児の機能発達を統括的、かつ“積極的に促進”し、障がい児の全人的な発達支援を目指す医療である。

当センターが新生児医療、ならびに救急救命集中治療を旗頭に日本一の急性期小児病院を目指す中、慢性疾患が中心となる保健発達部、とりわけ発達部門はその旗頭の下で部門に応じた長所・利点を発揮し、センターと県民へ貢献していかなければならない。県内はもとより日本の子どもたちと子どもたちを支える人々に向けて、多数の貴重な診療経験に基づく情報・エビデンスを発信し、それに基づく魅力あふれるメッセージを提示すると共に、必要十分な医療・訓練・療育環境が県内全域に整うように、これに係わる専門家を育成し、子どもの医療のオピニオンリーダーとして活動することが使命ではないかと思われる。平成 29 年度から、病気・障がいとなる前の対応として、発達障がいとは診断されていないが養育の悩みをもつ養育者を対象とした至適な養育方法に関する早期子育てサポートプログラムを継続している。これまでに参加された家族からは高い評価を得ており、今後の継続とさらなる発展の要望がある。このような成果とともに、子どもの医療と養育環境のオピニオンリーダーとしての当センターの役割を念頭に、今後の診療と様々な活動を展開するように努めていきたい。

(保健発達統括部長 浜野 晋一郎)

## 第2章 小児保健業務

### 1 地域保健業務

#### 埼玉県予防接種センター

平成13年2月に知事より指定されて埼玉県予防接種センターとなった。その目的は、県内市町村が行う予防接種事業の支援策として、県疾病対策課とともに、県民が安心して予防接種を受けられる体制づくりに協力するものである。業務の内容は次の3本柱からなっている。

市町村からの依頼又は紹介による予防接種の実施。予防接種の実施は、当センター予防接種・国際保健外来で行っている。

予防接種担当者又は医療関係者からの予防接種医療相談を受けている。令和3年度の医療相談事業の件数546件（前年比33件増）で、内訳は電話480件（36件増）、メール66件（3件減）、Fax0件（増減なし）であった。

市町村予防接種担当者に対する情報や知識の提供。平成16年7月1日より毎月1回メールで県内全市町村および希望医療機関に「埼玉県予防接種センターだより」をだしている。今年度はNo 2021-04からNo 2022-03まで送信した。

令和3年度の予防接種件数は1632件（前年比23件増）であった。

#### 予防接種に関する知識や情報の提供

1. 川野 豊. 第23回彩の国予防接種推進協議会 学術講演会. (さいたま市)「新型コロナワクチンからワクチンの基本と変異株への対応が見えてくる」 令和3年4月24日
2. 菅沼栄介. 第9回ワクチンフォーラム (さいたま市)「BCG ワクチンの最近の見解について」令和3年7月4日 予防接種センターからの報告
3. 川野 豊. さいたま市与野医師会・「新型コロナウイルス感染症ワクチン接種に係る学術講演会」(さいたま市) 「新型コロナウイルス感染症にワクチンは効くのか?～変異型ウイルスも含めて～」令和3年5月7日
4. 川野 豊. 公益社団法人埼玉県看護協会 継続教育等看護の質向上に関する事業等 (さいたま市)「新型コロナウイルス感染症とワクチン」(動画配信) 令和3年6月8日
5. 川野 豊. 越谷市医師会 HPV ワクチンセミナー 最近のHPV ワクチンの話題と必要性 令和3年10月22日
6. 川野 豊. 越谷市医師会 HPV ワクチンセミナー HPV ワクチン積極的勧奨再開への期待について 令和4年3月23日

#### 健康被害調査

川野 豊.	予防接種健康被害調査委員会 (川口市)	令和3年8月31日
川野 豊.	予防接種健康被害調査委員会 (上尾市)	令和3年9月10日 (SARS-CoV-2)
川野 豊.	予防接種健康被害調査委員会 (久喜市)	令和3年11月4日 (SARS-CoV-2)
川野 豊.	予防接種健康被害調査委員会 (鴻巣市)	令和3年11月11日 (SARS-CoV-2)
川野 豊.	予防接種健康被害調査委員会 (上尾市)	令和3年11月19日 (SARS-CoV-2)
川野 豊.	予防接種健康被害調査委員会 (上尾市)	令和4年1月22日 (SARS-CoV-2)
川野 豊.	予防接種健康被害調査委員会 (所沢市)	令和4年3月18日

(菅沼 栄介)

## 2 保健教育活動

小児の疾病・保健対策として最も重要なのは、予防と早期発見対策である。そのためには地域でのレベルアップ、教育・啓蒙活動は必要不可欠である。そのために、三次医療機関の蓄積された情報を活用しながら、地域で活動している小児保健関係者に基礎知識および最新情報を提供している。また、相談・質問・要望を受け、全県下を対象にバックアップする活動を行っている。

### 埼玉県小児保健協会

埼玉県小児保健協会は保健師・看護師・助産師・養護教諭・医師・歯科医師・コメディカル・保育士・福祉関係者等で構成される。日本小児保健協会と連携して、埼玉県の小児保健全般に関する研究、知識の普及とその事業の発展をはかり、小児保健・福祉を増進することを目的としている。事務局は当センターにおかれ、協会活動の中心となって企画・運営を行っている。令和3年度は以下の事業を行った。

- ① 第93回研究会（令和3年6月20日（日）埼玉県立小児医療センター 6F 講堂  
テーマ：「コロナ禍における小児保健の問題点と対策」  
基調講演「コロナ禍における小児医療と小児保健」  
講師：埼玉県立小児医療センター 病院長 岡 明  
参加者：59名
- ② 第94回研究会（令和3年10月30日（土）埼玉県立小児医療センター 6F 講堂  
講演①「医療的ケアは必要な児童の就学相談や地域連携について」  
講師：埼玉県立川島ひばりが丘特別支援学校 小林朋恵氏  
講演②「学校内における医療的ケア児の実際」  
講師：埼玉県立川島ひばりが丘特別支援学校 内田真由美氏  
参加者：42名

（菅沼栄介）

## 3 保健予防業務

### マス・スクリーニング

2012年10月より導入されたタンデム型質量分析装置（タンデムマス法）を用いた検査を含め現在、新生児を対象に20疾患の先天性代謝異常症等のスクリーニングを実施している。また厚生労働省の通達により2018年4月からは、CPTⅡ欠損症（脂肪酸代謝異常）も対象疾患として追加している。令和3年度には初回検査として39,815名の検査を行い、63名の新生児が精密検査として当センターを含む専門病院に受診をした。2012年以降タンデムマス法によりアミノ酸代謝異常症で22名、有機酸代謝異常症で22名、脂肪酸代謝異常症で15名の患児を同定した。また、昨年度は従来からの対象疾患である先天性（原発性）甲状腺機能低下症を21名および先天性副腎過形成症を3名同定した。

（三井 規雅）

## 埼玉県マス・スクリーニング検査 年度別推移 (患者同定数)

埼玉県立小児医療センター 検査技術部 マスクリーニング検査室

年度	2017	2018	2019	2020	2021	合計/割合 (%)
受検者数(初回)	44,079	42,573	41,417	40,179	39,815	440,092
再採血数 (のべ人数)	1,912	1,687	1,645	1,641	1,459	18,866
精密検査数	80	69	64	64	63	644
再採血率 (%)	4.34%	3.96%	3.97%	4.08%	3.66%	0
精査率 (%)	0.18%	0.16%	0.15%	0.16%	0.16%	0

フェニルケトン尿症	0	0	0	1	1	12
メープルシロップ尿症	0	0	0	0	0	0
ホモシスチン尿症	0	0	0	0	0	0
シトルリン血症1型	0	0	0	1	0	1
アルギニノコハク酸血症	0	0	0	0	0	0
メチルマロン酸血症	0	0	2	0	0	3
プロピオン酸血症	2	0	2	2	0	13
イソ吉草酸血症	0	0	1	0	0	1
メチルクロトニルグリシン尿症	0	0	0	2	1	3
トドロキシメチルグルタル酸血症	0	0	0	0	0	0
複合カルボキシルーゼ欠損症	0	0	1	0	0	1
グルタル酸血症1型	0	0	0	0	0	0
β-ケトチオラーゼ欠損症	0	0	1	0	0	1
中鎖アシルCoA 脱水素酵素欠損症	2	0	0	1	1	6
極長鎖アシルCoA 脱水素酵素欠損症	0	1	1	1	0	6
三頭酵素/長鎖3-ヒドクサ酸 CoA脱水素酵素欠損症	0	0	0	0	0	1
カルニチン/カルニチン トランスフェラーゼ-1欠損症	0	0	0	0	0	0
カルニチン/カルニチン トランスフェラーゼ-2欠損症	0	0	0	0	1	2
全身性カルニチン欠乏症	0	0	0	0	0	0
グルタル酸血症2型	0	0	0	0	0	0
シトルリン欠損症	2	1	2	0	0	9
ガラクトース血症	0	0	0	2	0	6
原発性甲状腺機能低下症	15	25	18	19	21	196
中枢性甲状腺機能低下症	3	0	1	0	0	4
先天性副腎過形成症	2	2	1	2	3	18
合計	26	29	30	31	28	283
患者同定率	0.06%	0.07%	0.07%	0.08%	0.07%	0.06%

※表右端の合計/割合(%)は2012年度からの累計した値となります。

- 2022年6月30日現在 -

# 第3章 外来業務

## 1 総括

保健発達部門の外来診療は、保健および発達部門にそれぞれ分かれて行われている。保健部門は、精神保健外来、心臓検診外来などの、医療機関、ならびに乳幼児健診や学校健診等で指摘された心身に何らかの問題をもつ子どもたちの診療が行われている。さらに、基礎疾患などのために地域で予防接種が困難な方、感染リスクの高い海外渡航予定の方なども対象にした国際保健外来として対応している埼玉県予防接種センターとしての機能も担っている。発達部門においては、乳幼児期に発達に何らかの問題をもつとされた子どもたちの診断、経過観察および指導が行われている。

(保健発達統括部長 浜野 晋一郎)

保健発達部門診療科別外来患者数(令和3年度)

区分	診療月 診療実日数	4月		5月		6月		7月		8月		9月	
		新来	延数	新来	延数	新来	延数	新来	延数	新来	延数	新来	延数
保健部門	精神保健	18	571	13	484	19	588	19	579	14	619	12	539
	予防接種	6	36	2	42	1	43	6	63	11	99	5	102
	生活アレルギ-	8	36	6	28	2	26	2	23	3	38	5	27
	夜尿・遺尿	8	161	3	145	7	153	7	160	7	143	6	136
	心臓検診	3	47	1	21	10	39	32	93	26	66	9	63
	延べ患者数計	43	851	25	720	39	849	66	918	61	965	37	867
	1日平均患者数	2.0	38.7	1.4	40.0	1.8	38.6	3.1	43.7	2.8	43.9	1.9	43.4
	発達外来	37	214	29	190	37	255	27	243	37	232	29	186
発達部門	装具外来	0	36	0	30	0	34	0	34	0	48	0	39
	アセスメント外来	0	8	0	6	0	7	0	6	0	8	0	6
	多職種外来	1	72	1	56	0	87	0	81	0	92	0	85
	延べ患者数計	38	330	30	282	37	383	27	364	37	380	29	316
	1日平均患者数	1.7	15.0	1.7	15.7	1.7	17.4	1.3	17.3	1.7	17.3	1.5	15.8
合計	延べ患者数計	81	1,181	55	1,002	76	1,232	93	1,282	98	1,345	66	1,183
合計	1日平均患者数	3.7	53.7	3.1	55.7	3.5	56.0	4.4	61.0	4.5	61.1	3.3	59.2

区分	診療月 診療実日数	10月		11月		12月		1月		2月		3月		計	
		新来	延数	新来	延数	新来	延数	新来	延数	新来	延数	新来	延数	新来	延数
保健部門	精神保健	10	574	20	583	12	611	8	573	8	515	9	623	162	6,859
	予防接種	5	145	12	212	2	154	6	111	6	97	5	124	67	1,228
	生活アレルギ-	0	30	2	25	4	33	1	17	8	38	5	55	46	376
	夜尿・遺尿	7	179	4	153	4	143	7	164	4	104	4	178	68	1,819
	心臓検診	1	32	4	35	5	35	3	26	1	30	0	53	95	540
	延べ患者数計	23	960	42	1,008	27	976	25	891	27	784	23	1,033	438	10,822
	1日平均患者数	1.1	45.7	2.1	50.4	1.4	48.8	1.3	46.9	1.5	43.6	1.0	47.0	1.8	44.2
	発達外来	36	206	34	212	35	246	39	230	30	193	34	242	404	2,649
発達部門	装具外来	0	38	0	48	0	35	0	32	0	48	0	61	0	483
	アセスメント外来	0	6	0	8	0	8	0	4	0	7	0	6	0	80
	多職種外来	0	69	1	72	0	65	0	64	0	62	0	90	3	895
	延べ患者数計	36	319	35	340	35	354	39	330	30	310	34	399	407	4,107
	1日平均患者数	1.7	15.2	1.8	17.0	1.8	17.7	2.1	17.4	1.7	17.2	1.5	18.1	1.7	16.8
合計	延べ患者数計	59	1,279	77	1,348	62	1,330	64	1,221	57	1,094	57	1,432	845	14,929
合計	1日平均患者数	2.8	60.9	3.9	67.4	3.1	66.5	3.4	64.3	3.2	60.8	2.6	65.1	3.4	60.9



## 2 保健外来

### 1) 予防接種・国際保健外来(埼玉県予防接種センター)

地域で予防接種を受けられない方に対して、埼玉県予防接種センターとして予防接種を行っている。

予防接種担当者又は医療関係者からの予防接種医療相談を受けている。2021年度の医療相談事業の件数546件(前年比33件増)で、内訳は電話480件(36件増)、メール66件(3件減)、Fax0件(増減なし)であった。

市町村予防接種担当者に対する情報や知識の提供。平成16年7月1日より毎月1回メールで県内全市町村および希望医療機関に「埼玉県予防接種センターだより」をだしている。今年度はNo 2021-04からNo 2022-03まで送信した。

2021年度の予防接種件数は2846件(前年比150件減)である。

### 健康被害調査

川野 豊.	川口市予防接種健康被害調査委員会(川口市)	令和3年8月31日
川野 豊.	上尾市予防接種健康被害調査委員会(上尾市)	令和3年9月10日
川野 豊.	久喜市予防接種健康被害調査委員会(久喜市)	令和3年11月4日
川野 豊.	鴻巣市予防接種健康被害調査委員会(鴻巣市)	令和3年11月11日
川野 豊.	上尾市予防接種健康被害調査委員会(上尾市)	令和3年11月19日
川野 豊.	上尾市予防接種健康被害調査委員会(上尾市)	令和4年1月22日
川野 豊.	所沢市予防接種健康被害調査委員会(所沢市)	令和4年3月18日

### 予防接種に関する知識や情報の提供

1. 川野 豊. 第23回彩の国予防接種推進協議会 学術講演会.(さいたま市)「新型コロナワクチンからワクチンの基本と変異株への対応が見えてくる」 令和3年4月24日
2. 菅沼栄介. 第9回ワクチンフォーラム (さいたま市)「BCG ワクチンの最近の知見について」 令和3年7月4日
3. 川野 豊. さいたま市与野医師会・新型コロナウイルス感染症ワクチン接種に係る学術講演会 (さいたま市) 「新型コロナウイルス感染症にワクチンは効くのか?～変異型ウイルスも含めて～」 令和3年5月7日
4. 川野 豊. 公益社団法人埼玉県看護協会 継続教育等看護の質向上に関する事業等 (さいたま市)「新型コロナウイルス感染症とワクチン」(動画配信) 令和3年6月8日
5. 川野 豊. 越谷市医師会 HPV ワクチンセミナー (越谷市) 「最近のHPV ワクチンの話題と必要性」 令和3年10月22日
6. 川野 豊. 越谷市医師会 HPV ワクチンセミナー (越谷市) 「HPV ワクチン積極的勧奨再開への期待について」 令和4年3月23日

(菅沼 栄介)

表 1. 2021 年度予防接種等の件数

	3歳未満	3歳～6歳未満	6歳以上	計	前年比
2種混合			8	8	-4
3種混合	2		18	20	+4
4種混合	172	6	20	198	+19
A型肝炎	15	10	55	80	-29
BCG	16			16	+1
B型肝炎	157	4	79	240	+19
インフルエンザ	36	20	104	160	-103
狂犬病	23	9	57	89	-11
水痘	30	7	32	69	+8
ツベルクリン			1	1	+1
日本脳炎	7	10	20	37	-68
肺炎球菌	2	4	9	15	+1
肺炎球菌(結合型)	179	4	26	209	+44
破傷風			12	12	-7
風疹				0	-2
ポリオ(不活化)			12	12	+2
麻疹			2	2	0
麻疹・風疹混合	16	8	34	58	+3
ムンプス	13	5	23	41	-10
ロタウイルス	108			108	+70
ヒブワクチン	173	4	27	204	+41
ヒトパピローマ			30	30	+22
髄膜炎菌	2	1	16	19	+13
シナジス	1218			1218	+136
計				2846	+150

## 2) 心臓検診外来

心臓検診外来は、小学生以上の不整脈を中心に診療を行なっている。学校心臓検診の三次検診・学校心臓検診後の経過観察を主に行い、心房中隔欠損及び動脈管開存カテーテル治療前後の外来も行なっている。通常は木曜日の午後で、学校心臓検診の時期は木曜日の午前に三次検診を行っている。

新患は学校心臓検診が中心で、健康づくり事業団・さいたま市の一部（大宮、与野地区の一部）・他の検診業者、の三次検診を行っている。学校心臓検診の一次検診は、健康づくり事業団が約35,000人・さいたま市（大宮、与野地区）が約18,000人（昨年度よりも増加）で、50,000人以上の検診を行なっている。

新患数は、例年100名台であったが、令和2年度はCOVIDの影響による軽症者の受診控えなどで61名と大幅に減少していた。今年度は176名と過去6年間と比較しても非常に多かった。COVIDの影響が少なくなったこと、三次への抽出率などが影響していると考えられる。内訳は、例年通り中学生が最多であった。

疾患別では、不整脈が全体の62%（109名）で、内訳は心室期外収縮（42名）が最も多く、上室期外収縮（4名）は少なかった。その他、WPW症候群（16名）、QT延長症候群（29名：家族検査を含む）、頻拍（4名）などであった。

先天性心疾患は、心房中隔欠損7名で昨年度より多く、異常なしは46名であった。新患数の増加は必要であるが、一方で精密検査の精度も重要である。

検査部門では、例年通りトレッドミル運動負荷試験を中心とした生理検査が多く、QT延長症候群の遺伝子検査（他院への依頼）、WPW症候群に対するATP負荷試験・アミサリン負荷試験、も並列して行っている。

（星野 健司）

表1 心臓検診外来の疾患別内訳（令和3年度）

### 1) 不整脈

心室期外収縮	42
上室期外収縮	4
WPW症候群	16
完全右脚ブロック	3
QT延長症候群	29
I°・II°房室ブロック	3
上室・心室頻拍	4
その他	8
計	109

### 2) 先天性心疾患

心房中隔欠損	7
心室中隔欠損	0
肺動脈弁狭窄	0
僧帽弁逸脱・閉鎖不全	6
動脈管開存	0
その他	6
計	19

### 3) その他

川崎病既往	0
心筋症	2
マルファン	0
異常なし	46
計	48

表2 心臓検診外来 新患数の動向

	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度
就学前	3	0	1	0	0	0	0
小学生	43	51	42	44	47	21	71
中学生	63	69	46	58	63	37	101
高校生以上	9	14	14	13	3	3	4
計	118	134	103	115	113	61	176

### 3)生活アレルギー

コロナ禍による受診抑制が起こっていた令和2年度と比較して、生活アレルギー外来の新患数は46名(前年比12名増)、再来数は376名(前年比14名増)と令和3年度は上昇に転じた。昨年度から外来枠を週2枠(水曜日、金曜日の午後)に増やし今後の患者数の増加が期待される。主な疾患は食物アレルギー、気管支喘息、アトピー性皮膚炎、蕁麻疹、アレルギー性鼻炎、薬物過敏症などである。食物負荷試験も継続して行っているが、54症例であり前年度に比べ9例増加した。食物アレルギーのアナフィラキシーに対するエピペンの効能が認知されるようになり、エピペンの処方を行う機会が多くなっている。また学校、保育所、幼稚園などでの給食をはじめとする食物アレルギー対策についても多様性が増している。

#### 【生活アレルギー外来担当】

川野 豊(月曜午後)

佐藤 智(金曜午後)

(菅沼 栄介)

### 4)遺伝相談外来

受診者55家系(77回)の遺伝カウンセリングを行なった(表1)。

(大橋 博文)

表1. 2021年度遺伝相談

1.単一遺伝子疾患	家系	回数	2.染色体異常	家系	回数
ADGRG1関連疾患	1	2	del(1)(q25.3q32.1)	1	1
Angelman症候群	1	1	del(1)(q42.3)	1	1
Beckwith-Wiedemann症候群	1	1	t(2;10)(q37.1;p15.3)	1	1
BOR症候群	1	1	der(4)t(4;7)(q34.3;q36.2)	1	2
Cowden症候群	2	4	del(7)(q22q32)	1	3
Fanconi貧血	1	2	del(10)(q25.2q26.3)	1	1
Marfan症候群	1	2	del(11)(q24.1)	1	1
Myhre症候群	1	1	del(14)(q24.2q31)	1	1
Noonan症候群	1	2	21トリソミー(転座型)	2	5
Opitz GBBB症候群	1	1	21トリソミー(トリソミー型)	6	6
QT延長症候群	2	3	22q11.2欠失症候群	2	2
Schaaf-Yang症候群	1	2	47,XXY	1	1
Stickler症候群	1	2	48,XXXY	1	1
UBE2A関連疾患	1	1			
Verheij症候群+オスラー病	1	2	<b>3.多因子遺伝・その他</b>		
Wilson病	1	2	発達障害	1	1
遺伝性球状赤血球症	2	2	発達遅滞	1	1
遺伝性乳がん卵巣がん症候群	1	2			
歌舞伎症候群	1	1			
血栓症	1	1			
ジストロフィン異常症	3	5			
神経線維腫症1型	1	1			
糖原病IX型	1	1			
特発性心筋症	1	3			
肥大型心筋症	1	1			
網膜色素変性症	1	1			
難聴(コネキシン26異常)	2	2			
			計	55	77

## 5)精神保健外来

精神保健外来は、保健発達部の外来として、医療機関、保健機関、教育機関、福祉機関などから紹介された子どもと家族を診察している。令和3年度の新患者数は174人であり、主たる主訴（表1）、主たる診断名（ICD-10による：表2）、年齢（表3）、紹介元（表4）は以下の通りである。院外初診は増加している傾向にある。他機関とも連携を取りながら、より効率的な受診状況を整えることが今後の課題である。

（舟橋敬一 平山優美）

表1 2021年度精神保健外来主訴別新規患者数

主訴	新規患者数（人）
発達・言語の遅れ	56
行動の問題	56
不登校	28
身体症状	7
遺糞・遺尿（排泄の問題）	1
食行動の異常	0
学校や園での緘黙	0
吃音	1
チック	4
強迫的行動、強迫観念	2
抜毛	2
非行	0
過度の不安	3
抑うつ状態	1
希死念慮・自殺企図・自殺行為	0
睡眠の問題	3
虐待	8
その他	2
計	174

表2 2021年度精神保健外来疾患別新規患者数

ICD-10 診断カテゴリー	新規患者数（人）
F3 気分（感情）障害	
F32 うつ病エピソード	2
F4 神経症性障害、ストレス関連障害および身体表現性障害	
F40 恐怖症性不安障害	1
F41 他の不安障害	3
F42 強迫性障害	3
F43 重度ストレス反応 [重度ストレスへの反応]および適応障害	15
F44 解離性（転換性）障害	5
F45 身体表現性障害	5
F48 他の神経症性障害	1
F5 生理的障害および身体的要因に関連した行動症候群	
F50 摂食障害	0
F51 非器質性睡眠障害	1
F6 精神のパーソナリティおよび行動の障害	
F63 習慣および衝動の障害	2
F7 精神遅滞 [知的障害]	
F70 軽度精神遅滞	19
F71 中等度精神遅滞[知的障害]	2
F72 重度精神遅滞[知的障害]	2
F73 最重度精神遅滞[知的障害]	1
F78 他の精神遅滞[知的障害]	0
F8 心理的発達の障害	
F81 学力の特異的発達障害	12
F84 広汎性発達障害	58
F9 小児期および青年期に通常発症する行動および情緒の障害	
F90 多動性障害	34
F91 行為障害	0
F93 小児期に特異的に発症する情緒障害	0
F94 小児期および青年期に特異的に発症する社会的機能の障害	2
F95 チック障害	3
F98 小児期および青年期に通常発症する他の行動および情緒の障害	2
正常範囲	1
計	174

表3 2021年度精神保健外来年齢区分別新規外来患者数

初診時年齢区分	新規患者数（人）
幼児期前半	1
幼児期後半	5
小学前半	92
小学後半	60
中学生	12
高校以上	4
計	174

表4 2021年度精神保健外来紹介元別新規患者数

紹介元	新規患者数（人）
保健所	0
市町村保健センター	0
児童相談所	5
学校	0
教育センター	5
他医療機関	158
市町村福祉	0
その他	6
計	174

### 3 発達外来

発達外来の初診は就学前までの発達面における何らかの問題を指摘されたお子さんを対象としています。県内外の各地域で行われている乳幼児検診や発達相談からの紹介，医療機関からの紹介のほか，当センター内ではNICUを退院したハイリスク児や院内他科でフォローされているお子さんの依頼をお受けしています。小児神経専門医が担当し，症状や問題点の評価を行い経過観察するとともに，必要に応じて当センター内での訓練あるいは院外の指導・療育機関を紹介しています。

2021年度の初診児数は626人（院内紹介160人，院外紹介466人；医療機関487，保健センター143）であり，前年度より40人増（前年比107%）でした。表に記しました診断名は，初診時の暫定的なものです。発達外来はことばの遅れを紹介理由として受診される児が多いのですが，自閉スペクトラム症（ASD）の何らかの特性をもつ児がその半数以上を占めました。初診時の年齢は2歳～4歳が多く（2歳138人，3歳181人，4歳110人），3歳児もしくは3歳半検診後や就園前後の時期が多い傾向にありました。

（小一原玲子）

紹介元		初診時の主な暫定診断名	
<b>院外機関</b>		自閉スペクトラム症	358
医療機関	487	知的能力障害	84
保健センター・ 発達支援センター	143	発達障害	63
地域療育センター	5	全般的発達遅延	39
教育機関	0	言語発達遅滞	14
合計（重複あり）	635	脳性麻痺	6
		構音障害・吃音	6
		難聴	6
<b>院内紹介</b>		ハイリスク児	5
新生児科	60	表出性言語障害	4
耳鼻咽喉科	28	注意欠如・多動症	4
遺伝科	13	染色体異常・奇形症候群	4
神経科	13	選択性緘黙	3
脳神経外科	9	筋緊張低下	1
循環器科	9	正常範囲	20
外科	6	その他	10
総合診療科	6	合計	627
感染免疫科	5		
整形外科	3		
その他	8		
合計	160		

## 2) アセスメント外来 (担当：舟橋，平山，小一原，平田)

アセスメント外来は、発達外来から紹介された、発達に何らかの問題が疑われる幼児を複数の職種により総合的な評価を行う外来です。実際には医師（小児神経科医あるいは児童精神科医）、看護師、作業療法士、言語聴覚士および臨床心理士の5名が午前中3時間で保護者と順に面談します。同時に数人の保育士を配置して遊びや対人関係の場を形成し、行動・遊びを観察し、行動評価を行っております。また発達検査を別室で行います。引き続き行う合同カンファレンスにおいて、診断や必要な支援について討議を行います。その後に医師が保護者に評価結果、診断をお伝えし、今後の対応や手段を示しています。

2021年度の受診児総数は80人（女14，男66）で、前年度より22人増加しました（前年比138%）。集団外来のため、2020年度はコロナウイルス感染拡大を危惧し中止期間を設けたことにより減少しましたが、今年度は1年を通じて継続的に行うことができました。前年度から引き続き感染予防策をとりながら診療しました。具体的には幼児の人数を例年までの4人から2人に減らし、ご家族の入室人数制限、家族ごとに部屋を分けて行っております。参加した児の年齢は3歳から6歳までで、4～5歳が多くを占めました。診断の内訳は自閉スペクトラム症の診断を含むものが90%以上を占め、今までと同様の傾向でした。事後措置は、個々の発達障害特性や住居周辺で受けられる支援状況、家庭環境を考慮して総合的に検討しております。多くの方が地域療育センター・発達支援センター・発達支援事業所での集団もしくは個別の療育指導や保育所・幼稚園での加配対応につながっています。

(小一原玲子)

主な診断名		事後措置（重複あり）	
自閉スペクトラム症（ASD）	32	○院外・地域支援	
知的能力障害+ASD	38	通所・訓練施設・児童デイ	47
境界知能+ASD	4	保健センター・親子教室	10
知的能力障害	2	保育所・幼稚園（加配等）	42
境界知能	1	○院内支援	
ADHD	1	発達外来	61
なし	2	作業療法	13
合計	80	言語療法	1
		心理相談・検査	4
		精神保健外来	4

## 3) 装具診

装具診は、毎週火曜日の午後3:00～4:00に行われている。整形外科医師、リハビリテーション科医師、理学療法士、義肢装具士が連携して患児を個別に十分検討して、装具などの処方、作成までを一貫して行っている。また火曜日には、seating clinicを開設し、複数の専門業者と協力して車椅子、座位保持装置などの作成を行っている。

整形外科医、リハビリ医、PTとが時間を割いて個別の症例について検討する機会となっており、装具療法の限界の患児についての手術適応についても話し合いを行っている。

また、当院脳神経外科がおこなっている脳性麻痺患児への選択的後根神経切断術、バクロフェン持続性注療法との適応について、定期的にカンファレンス（痙縮治療外来：第1金曜日）をおこなっている。

(平良 勝章)

#### 4 多職種プログラム外来

多職種外来の内容は表に示すとおり施行した。

名称	対象	スタッフ	回数	目的
DK外来	0歳・1歳の Down 症児	遺伝科医師 PT・OT・心理士・栄養士・ 看護師・ケースワーカー	月 1 回	発育支援 両親の心理的援助 環境の整備
アセスメント外来	発達障害が疑われ る児	医師(神経科・精神科)・看 護師・OT・ST 心理士・ORT・保育士	週 1 回	遊びの場면을観察しながら、 発達障害の評価を行い、支援 方針を決定する
もぐもぐ外来 (哺乳摂食評価 外来)	哺乳・摂食障害 をもつ児	医師・歯科医師 看護師 PT・ST・OT 心理士・栄養士	月 1 回	哺乳摂食場면을観察・評価し 治療方針を決定する
ことり外来	気管切開 をしている児	耳鼻科医師・ST 相談室看護師	月 1 回	気管切開をしている児の育児 支援、コミュニケーションの支 援、保護者支援
痙縮治療外来	痙縮に困っている 脳性麻痺児	脳神経外科医師 整形外科医師 PT・OT	月 1 回	痙縮治療の適応判断を行い、 各治療について患者家族へ 情報提供を行う
早期子育てサポー ト事業 (FESS)	自閉スペクトラム症 診断児 および リスク児	OT・ST 保育士	年 3 回	保護者の障害理解を促し、養 育力を向上させるための保護 者向け講義プログラム
つくしんぼ外来	出生体重が 1500g 未満の児	新生児科医師 看護師 PT・OT・心理士	週 1 回	発達評価、家族支援、虐待予 防、必要に応じて地域への情 報提供を行う
難聴ベビー外来 * R3年度は COVID-19 感染拡大防止のため休 止した	0歳の難聴児	耳鼻咽喉科医師 ST・看護師・音楽療法士・ ケースワーカー	月 1 回	新生児聴覚スクリーニングで 難聴と診断された児の耳鼻科 的ケア・補聴器適合・保護者 支援・音楽療法

(成田 有里)

#### 1)DK 外来(ダウン症候群総合支援外来)

ダウン症候群のお子さんご家族を対象として、育児に役立つ情報を提供するとともに、両親への心のケアを目的とした多職種の専門家によるプログラム外来である。今年度はコロナ禍のためにオンラインでの開催を実施している。

(大橋 博文)



## 5 コメディカル業務

### 1) 理学療法

令和3年度は、常勤8名、非常勤1名、8月からは常勤8名、育児休業代替1名、非常勤1名の体制で業務を行った。

令和3年度の初診患者数は483名で令和2年度と比べて72名増加した。疾患別内訳を見ると、運動発達遅滞(25%)、次いで中枢神経疾患(23%)、骨関節疾患(20%)となっている。比率の変動はあるが、上位3までは、例年通りである。【表1】。初診処方科では、新生児科(34%)、整形外科(22%)、集中治療科(22%)となり約78%を占め、PICU・NICUからの早期介入、整形外科・脳神経外科の術後集中リハ等、急性期のリハビリテーションが中心になっている【表2】

新型コロナウイルス対応を継続しつつ、業務を遂行した。診療報酬では前年度と比べて111%の稼働率(平成31年度比96%)となった【表3】。

(PT 白子 淑江)

表1 初診患者疾患分類

運動発達遅滞	121
中枢神経系疾患	109
骨関節疾患	98
呼吸器疾患	60
悪性新生物	33
奇形	16
その他	16
染色体異常	13
消化器系疾患	10
廃用症候群	5
神経筋疾患	2
合計	483

表2 初診処方科

新生児科	163
整形外科	107
集中治療科	107
神経科(発達外来を含む)	47
血液腫瘍科	37
脳神経外科	11
総合診療科	11
合計	483

表3 月別診療件数内訳

月	診療日数	件数			診療報酬	初診患者数		
		外来	入院	合計	合計点数	外来	入院	合計
4	22	248	732	980	378230	6	34	40
5	18	189	726	915	346495	11	34	45
6	22	241	822	1063	425280	6	48	54
7	21	229	779	1008	382605	6	37	43
8	22	204	766	970	368095	6	46	52
9	20	191	786	977	369930	5	27	32
10	21	197	941	1138	437130	2	42	44
11	20	203	947	1150	441280	3	34	37
12	20	196	919	1115	426125	1	33	34
1	19	188	737	925	350580	5	33	38
2	18	165	712	877	307250	2	27	29
3	22	226	862	1088	397235	5	30	35
合計	245	2477	9729	12206	4630235	58	425	483

## 2) 作業療法

令和3年度は常勤5名と育休代替職員1名の体制で勤務した。月別実施件数内訳は表1の通り、実施件数の合計は4,578件(昨年度は4,058件で520件増)、一日平均実施件数は18.7件(昨年度は16.7件)であった。引き続きCOVID-19蔓延の影響を受けての診療となったが昨年に比べ実施件数の合計は増加した。

今年度より表2の通り、初診患者数にアセスメント外来、もぐもぐ外来、痙縮治療外来、つくしんぼ外来の件数を加えた。初診患者は作業療法外来112件(昨年度は148件で36件減)、入院52件で(昨年度は57件で5件減)、合計164件(昨年度は合計205件で41件減)であった。初診患者(作業療法外来・入院)の障害種別内訳及び処方科別内訳は表3・4の通りであった。作業療法は外来や入院の他、表5に示す発達評価外来であるアセスメント外来、哺乳摂食評価外来であるもぐもぐ外来、痙縮治療外来、低出生体重児のフォローアップ外来でスクリーニング評価を実施するつくしんぼ外来を他職種と協業している。また県内の特別支援学校への特別講師派遣や自由診療にて実施している『早期子育てサポート事業(Family's Early Support in Saitama:FESS)』は昨年に引き続き実施した。

(OT 島崎 貴子)

表1 月別実施件数内訳

月	実施件数				一日平均実施件数			初診患者数			実施 点数
	診療 日数	外来	入院	合計	外来	入院	合計	外来	入院	合計	
4	22	271	102	373	12.3	4.6	17.0	29	4	33	197,070
5	18	207	101	308	11.5	5.6	17.1	24	11	35	156,395
6	22	265	195	460	12.0	8.9	20.9	27	4	31	235,865
7	21	253	172	425	12.0	8.2	20.2	23	8	31	217,265
8	22	256	149	405	11.6	6.8	18.4	27	3	30	209,920
9	20	244	139	383	12.2	7.0	19.2	21	1	22	197,590
10	21	250	174	424	11.9	8.3	20.2	22	3	25	222,055
11	20	279	139	418	14.0	7.0	20.9	22	4	26	218,520
12	20	286	124	410	14.3	6.2	20.5	24	4	28	213,985
1	19	252	102	354	13.3	5.4	18.6	13	2	15	184,130
2	18	192	80	272	10.7	4.4	15.1	18	3	21	141,955
3	22	230	116	346	10.5	5.3	15.7	15	5	20	179,295
<b>合計</b>	245	2,985	1,593	4,578	12.2	6.5	18.7	265	52	317	2,374,045

表 2 初診患者 内訳

内容	件数
作業療法 外来	112
作業療法 入院	52
アセスメント外来	80
もぐもぐ外来	14
痙縮治療外来	10
つくしんぼ外来	49
合計	317

表 3 初診患者(作業療法外来・入院) 障害種別内訳

障害種別	件数	比率
知的・精神機能の障害	92	56.1%
姿勢・運動発達の障害	23	14.0%
整形外科疾患	5	3.0%
小児がん疾患	44	26.8%
合計	164	100%

表 4 初診患者(作業療法外来・入院) 処方科別内訳

処方科	件数	比率
発達外来	66	40.2%
神経科	14	8.5%
精神保健	11	6.7%
脳神経外科	7	4.3%
整形外科	18	11.0%
総合診療科	4	2.4%
遺伝科	6	3.7%
血液腫瘍科	38	23.2%
合計	164	100%

表 5 多職種集団外来等の業務

外来名・業務名	実施件数・支援内容等
アセスメント外来(発達評価外来)	80 人実施
もぐもぐ外来(哺乳摂食評価外来)	14 人実施
つくしんぼ外来(低出生体重児フォローアップ外来)	58 人実施
痙縮治療外来	12 人実施
装具診	4 人実施
ダウン症候群総合支援外来(DK 外来)	2 回の講義担当、参加家族数 47 組
早期子育てサポート事業(FESS)	14 人実施
特別支援学校への特別講師派遣	宮代特別支援学校に 6 回訪問、合計 27 人の支援

### 3) 視能訓練

令和3年度の視能訓練業務内容は表1の通りである(表1)

今年度は4月から12月までは常勤2名(うち育休代替1名)非常勤1名、1月中旬まで常勤1名、非常勤2名、それ以降3月までは常勤1名、非常勤1名で眼科検査・訓練を行った。

検査・訓練数ともに新型コロナ前の80%まで戻すことができたが、非常勤の勤務状況によって月別検査数も変動した。

弱視訓練の新患数疾患別内訳は表2の通りである(表2)

疾患別では遠視性不同視弱視と斜視弱視が訓練の75%を占め、例年と同様であった。

弱視鏡訓練の対象者は視神経膠腫1名であった。

(ORT 小林 順子)

表1 令和3年度月別件数

月	診療日数	検査人数	検査件数	訓練件数	弱視鏡 訓練件数	病棟検査 件数	アセスメ ント外来
4月	21	382	695	20	0	26	8
5月	18	336	582	23	0	18	6
6月	22	388	706	30	0	30	7
7月	18	347	615	20	0	23	6
8月	21	401	748	21	0	30	7
9月	20	334	609	16	0	37	6
10月	21	429	729	21	0	29	6
11月	20	386	679	24	0	29	8
12月	20	381	683	22	0	23	8
1月	19	339	603	18	0	26	2
2月	18	297	473	18	0	14	7
3月	20	344	620	18	1	26	6
合計	238	4364	7742	251	1	311	77

表2 視能訓練新患疾患別内訳

弱視訓練	64名
遠視性不同視弱視	30
斜視弱視	18
屈折性弱視	5
近視性不同視弱視	5
形態覚遮断弱視	4
乱視性不同視弱視	2
弱視鏡訓練	1名

#### 4) 言語聴覚療法

令和3年度の言語聴覚療法は常勤3名、非常勤5名の言語聴覚士が担当した。

脳血管リハビリテーション（評価・指導）の総数は2456人（初診266人、再来2190人）であった。COVID-19感染拡大防止対策に関連したキャンセルも多くみられたが、昨年と比較して受診者総件数は300人ほど増加し、受診回数回復の傾向が見られた。（表1）。

脳血管リハビリテーションにおける各疾患の総件数に占める割合は、第一に難聴児、ついで口唇口蓋裂児が多く全体の約半数を占めており、特に難聴児の件数は昨年と比較して約100件増加した。集団外来である難聴ベビー外来は昨年に引き続き感染拡大防止の観点から休止しているが、それぞれのお子さんに対して個別での対応を徹底し、0歳代のお子さんに対する支援を充実させたことが件数増加の要因となったと思われる。補聴器外来、聴力検査等において耳鼻咽喉科医と連携しながら診療を実施した。

口唇口蓋裂児に対しては、発音外来にて形成外科医、矯正歯科医、耳鼻科医などとチームを組み、地域のことばの教室や療育施設とも丁寧に連携をとりながら総合的支援を行った。また、初めてご家族向け勉強会・交流会（オンライン）を開催し、今後の継続を望む声が多く聞かれた。

口唇口蓋裂児および難聴児に対する診療は、当院言語聴覚部門の重要な役割であることから、今後も手厚い支援が必要だと考える。

また、毎年吃音の相談および訓練数の増加は続いており、今後も増加する見通しである。

今年度言語聴覚士が携わった専門外来は、発音外来（口唇口蓋裂言語外来）、補聴器外来、ことり外来（気管切開言語外来）であった。各件数を表2に示した。また、昨年度に引き続き、自閉スペクトラム症児およびそのリスク児の保護者に対する支援として、作業療法士と協力し『早期子育てサポート事業（Family's Early Support in Saitama：FESS）』を実施した。これは、医療保険適応外の自由診療にて実施している。

子どもの言語やコミュニケーションの発達を促すためには、子どもの日常的な養育環境を整えることが非常に重要である。また、吃音をはじめ、適切な支援を行える施設が不足している現状もあるため、院内の臨床業務だけでなく、県内の通級指導教室（ことばの教室）や乳幼児の療育機関、ろう学校および難聴児通園施設等と積極的に連携を取り、講義や研修会開催など専門職向けの啓発活動にも力を入れた。

（遠藤 俊介）

表1 疾患別患者内訳表(脳血管リハビリテーション)

	新患	再来	合計
MRによる言語発達遅滞	16	22	38
特異的言語発達障害	3	34	37
学習障害	10	52	62
失語症	0	32	32
高次脳機能障害	3	21	24
自閉スペクトラム症	43	40	83
運動障害性構音障害	1	9	10
脳性麻痺	0	0	0
吃音	19	180	199
音声障害	0	0	0
難聴	75	594	669
人工内耳	0	0	0
小耳症、外耳道閉鎖	0	0	0
口唇口蓋裂	28	636	664
鼻咽腔閉鎖機能不全	5	65	70
その他の器質的構音障害	0	19	19
機能性構音障害	19	136	155
舌小帯短縮症	0	4	4
摂食障害	8	44	52
気管切開後の発声障害	2	68	70
音韻障害	0	0	0
その他	6	67	73
(内重複例)	28	167	195
計	266	2190	2456

表2 外来別件数

発音外来	505
ことり外来(気管切開言語外来)	29
難聴ベビー外来 (R3年度は休止)	0
補聴器外来	667
聴力検査	2620

## 5)心理

本年度は常勤心理士が4名、非常勤心理士7名/1週間で心理部門を担当した。今年度の他科からの新患依頼件数は560件、継続相談件数は2067件、また心理検査件数は665件であった。他科からの新患依頼内訳(表3)では、発達外来と精神科からの依頼が最も多く、次いで新生児科と、例年通りこの3科からの依頼が多かった。特に精神科からの依頼は、昨年度までと比べてかなり増加している。昨年度はCOVID19対応として外来制限を行ったため、一昨年度と比べると全体的に減少していたが、今年度は例年通りか、それ以上まで回復している。コンサルテーション件数は、641件と減少しているが、その分、つくしんぼ外来を始め多職種特別外来での役割が増している。

(成田 有里)

表1 令和3年度患者数

新患件数	560
継続相談延べ件数	2,067
心理検査件数	665
コンサルテーション件数	641

表2 年齢別依頼内訳(令和3年度)

	男児	女児	合計
0~5(歳)	178	105	283
6~12	148	84	232
13~	26	19	45
合計	352	208	560

表3 他科からの新患依頼内訳(令和3年度)

依頼元科	人数
新生児科	119
感染免疫科	7
血液腫瘍科	4
神経科	18
遺伝科	19
精神科	177
総合診療科	5
脳神経外科	33
発達外来	177
アセスメント外来	1
合計	560

表4 多職種特別外来(令和3年度)

外来種別	人数
アセスメント外来	80
もぐもぐ外来	14
DK外来	48
つくしんぼ外来	123